多 摩 市 立 瓜 生 小 学 校

学 校 だ よ り

平成２９年度　第６号
平成２９年 ９月 １日

◆おかえり！子供たちを迎える250本の ど根性ひまわり

見えない人とのつながり

校長　吉田　正行

夏休みを終え、満開のど根性ひまわりに迎えられて元気な子供たちの声が学校に戻ってきました。いよいよ２学期の始まりです。今年の夏は、天候不順で涼しい日が多かったのですが、瓜生小学校の子供たちは元気に２学期の始業式を迎えられました。ありがとうございました。

さて、夏休みの間にいろいろな所に出かけた子供たちも多かったことでしょう。私は箱根に電車で行く機会がありました。そこで考えさせられる光景に出会いました。電車は箱根湯本が終点でその後、清掃して折り返しになります。自分たちが食べたお弁当のごみやペットボトルなどをそのままにしている人が多くいました。中には食べ残しのおかずや飲みかけのものもあります。「掃除してくれる人がいるから」と思って気にせずに置いていくのでしょう。

しかし、そこで自分たちのごみを持って降りる人が目にとまりました。年配の女性が小学校１．２年生くらいのお孫さんたちに「自分のごみは自分で片付ければ、お掃除する人も楽でしょう」と諭し、子供たちも「うん」と頷き、自分のごみを持っていきました。会ったこともない見えない人の存在（車内を清掃する人）を想像することの大切さを教えていたのです。

最近、駅や公園などの公共のトイレが汚く使われていたり、図書館の本が切り抜かれたりしているということが話題になりました。「どうせ掃除する人がいるのだから、汚したって平気さ」「自分一人ぐらい、写真を切り抜いてもわからないだろう」と思っているのかもしれません。しかし、次に使う人のことを考えず、「掃除するのは自分ではないから汚し放題。自分の本ではないから切り抜いても平気」という大人になってはいけません。「誰かが見ているからやるのではなく、自分がいやだからきちんとする。次の人が気持ちよく使えるようにする」と考え、行動できる大人になってほしいのです。海外からの訪問者が多くなっています。見えない人の気持ちが考えられるということが、オリンピック・パラリンピックに向けてのおもてなしにつながるのではないでしょうか。日本人が誇れる「おもてなしの心」を伝えるために、大人が襟を正すとともに、子供たちに声をかけていくことが必要であると思いました。

お盆に故郷に帰り、お墓参りをしてきました。墓の前で手を合わせながら、小学生の時に亡くなった祖母が「次に使う人のことを考えるんだよ」「悪いことは、誰も見ていなくても、してはいけないよ。一生自分が見ているんだよ」とよく言っていたことを思い出しました。人は見えないところでもつながっているということが想像できる子供にしていきたいものです。

夏休み中も団地のお祭りや地域プール、青少協のバスハイク、ラジオ体操等、私たちの見えないところで子供たちを支えてくださる方々の活動があったことに感謝するとともに「自分大好き、友達大好き、命と地域を大切にする瓜生の子」を育てるために、保護者や地域の方々と力を合わせて教育活動を進めてまいります。２学期もどうぞよろしくお願いいたします。